前途多難です…

ＩＤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
前途多難です…

【Ｎコード】
Ｎ８４４３Ｐ

【作者名】
ＩＤ

【あらすじ】
心を砕かれた男の子
その男の子の世話？をしている女の子のお話

作者は未熟者ですが誉められれば伸びるタイプです。

とりあえずＲ１５指定をしていますが……どうなのでしょう？
作者は何もわかりません。

プロローグ（前書き）

初連載です。
よろしくお願いします。

プロローグ

私は彼の車椅子を押す。
何も考えれない、何もできない、何もする気がない彼の車椅子を押す。

彼の心は砕けていて、もう治すことはできない。
ただ生き続けるだけの存在になってしまった。

まるで意識のある植物人間…。
彼はもう何もしない。
恐怖もしないし、抵抗もしない。
心のない人形みたいになってしまった。

本当は恐がりたいのに、抵抗したいのに…。
いや、彼は何も感じないのだ。
何も認識しないのだ。
仲の良かった私の存在すら…。

カラカラと音を立てて移動する。

今日は花を見るつもりだ。
綺麗な花を彼が認識することができたらまた笑ってくれるかもしれない、と淡い希望を持って…。

何故……彼がこんな目にあったのだろう。

確かに彼は女顔で、男の子なのに可愛いの分類に入る。
それは確かだ。

だが、だからといって、心が砕かれるまでのことをされる必要があるだろうか？
いや、ない！

麻薬を打たれて、監禁されて、手足の健を切られる必要があったか？
いや、あるはずがないのだ！

ここまで神様が不公平だとは思わなかった。
天才に生まれて、容姿がいい。

だが、そこまでだ。
美しい未来は壊された。砕かれた。

たった一人の女のせいで！
その女を取り巻く環境のせいで！

なんて彼は不幸なのだろうか。
だが、私が守ってみせよう。
取り戻してみせよう。
あの時、守れなかった私の罪として…。

絶対に――――

プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？

これからよろしくお願いします。

感想などよろしくお願いします。

悲哀（前書き）

二話目です。
よろしくお願いします。
なお、あらすじはまだ固定できていないので「あれ？あらすじ変わってね？」と思われてもそこは作者が未熟でまだ先を何も考えてないのに投稿したヴァカですのでご了承ください。

悲哀

私の朝はまず彼に挨拶することから始まる。

「おはよう。」

「……。」

しかし返事はない。
いつもの事だから仕方ない。
彼は何もできないのだから仕方ないのだ。

しかし、やはり悲しくなる。
返事を返してくれれば、少しは私も楽になる。
いや、これは甘えだな。

「ご飯、食べるかい？」

「……。」

やはり返事はしない。
首も動かさないから否定とも肯定とも取れない。
しかし、これもいつものことだ。
私は念のため彼に質問をするのだ。

治ってくれていれば、彼は何かしら反応をしてくれるはずだから…。

いや、その前にあの表情が変わっているか？

虚ろでどこを見てるのかわからない目。
少し開いている口。
ただ付いているだけでブランとしている腕。

どれも扇情的だから、時々理性が壊れかける。
いや、時々壊れている。

昨日も一緒に寝た彼を抱えて、椅子に座らせる。
あの出来事のせいで痩せてしまった彼は私の力で易々と抱えれる。

…複雑な心境だ。

ご飯をテーブルに置き、少し彼を観察する。
これは日課。
さすがに私も人間だ。
彼という成分を補給するために観察するのだ。

そういえば、今日は学校だ。
まぁ、何も変わらない。
最近では彼を無償で見られるということで見に来る奴がいるから少し不愉快だが…。

しかし、それはまぁ、仕方ない。
彼は美しいからな。
見に来ない人間の方がおかしい。

ご飯はいつも口移しで食べさせる。

これは仕方のないことだ。
こうしないと彼は食べるという行為はできない。
いや、実際は食べてはいないが…。

たが、彼の体調などを整えるためだ。
仕方ない仕方ない。

それに彼は何も感じないのだから、この様な行為をしても感じはしない。
だから大丈夫だ。

この状況を利用しているみたいで自己嫌悪に陥ってしまう…。

だが、仕方ないのだ。
そう、仕方ないのだ。

悲哀（後書き）

つ、疲れが…。

本当に最近、寝不足なんですよね…。

憎悪（前書き）

三話目です。
これからも頑張りますので応援よろしくお願いします。

…ってまず応援してくれる人いるのかなぁ。

いえ！応援してる人がいなくとも……やっぱり誰か応援よろしくお願いします。

憎悪

食事を終えた私達は彼を万歳のポーズにさせ、パジャマを脱がせる。

その腕にはあの女が残した跡がある。
注射痕と腕の傷、沢山のキスマーク。
…ムカつく。

上半身裸になるが、やはり彼は何も感じないので恥ずかしがる様子もない。

やはり、体にも沢山のキスマークがある。
…イラつく。

次にズボンを脱がせる。
パンツを残して、裸の状態。
理性が壊れかけるが我慢をする。

でもやっぱり、キスマークがある。
傷がある。
…最悪。

犯してあげた方がいいだろうか？
私で上乗せしてあげた方がいいのではないか？と沢山の考えが浮かぶ。
しかし、しない。してはいけない。

今、ここで彼を犯したとしたら彼は永遠に治らないと私は思っている。

だから我慢をする。
綺麗な肌の上に制服を着せる。
やっぱり、彼は何を着ても似合うものだ。
この前、私の服を着せてみたら、私以上に似合っていた。
すごく可愛かった。

着替えを終えたら彼を車椅子に乗せて、私も着替える。
彼の前で…。

やはり、着替える自分を彼に見られているのは興奮してしまう。
実際、見えてはいないだろうが。

脳が目に映る全てのものをシャットダウンしているのだ。
失明と同じようなものだ。

実際、彼は全ての感覚を消している。
だから何も認識しない。
できない。

心に付いた傷は全てを失わせた。

これもあの女のせいだ。
できることならこの手で殺したい。
それほど憎んでいる。
あの女がいなければ、彼はいつも通り、私に笑顔を振りまいてくれただろうに…。
いや、守れなかった私のせいでもあるのだ。

仕方ない…。

だが、やはり、あの女は憎い。

憎悪（後書き）

感想などお待ちしております。

強欲（前書き）

四話目です！

今日は嬉しいことがありました！

一日中踊りたいです。

……冗談です。一日中踊るなんてできません…。

強欲

着替えも終えて、登校する。

学校に行く理由はある。
第一に学校という場所を認識すれば治るかもしれないということ。
第二に彼を一人にしないためだ。
私もとりあえず学生だ。
学校に行かなければならない。
だが、彼を一人にする訳にはいかないので、一緒に連れていく。

カラカラと車椅子を押しながら、周りの景色を見る。
今の時期は秋だ。

「今日は紅葉が綺麗だな。そう思わないかい？」

「……。」

やはり、返事はない。

彼にはやはり何も見えないし、聞こえないのだろう。
治ったら必ず沢山話そう。

彼は今、砕けた心のピースを集めているのだ。
そのピースが揃えば、彼はきっと治ってくれる。
そう私は信じてる。

学校に着く。

「あぁ、来た来た。おーい。」

先生が私を呼ぶ。

男の先生だ。

いい忘れていたが、私たちは高校二年生だ。

つまり、階段を一つ上がらなければならない。

私一人では車椅子ごと彼を持ち上げることはできないので先生に頼み、私は彼を、先生は車椅子を、という形で了承してもらった。

彼を抱える役をやりたいと言う先生方が多数いたので、車椅子持ちを選ぶのも大変だった。

大体、私以外に彼に触れさせるものか。

実際、車椅子も持たせたくはないのだ。

だが、仕方なくだ。

まぁ、この先生はまだ信頼できるからいいだろう。

階段を上がり、先生にお礼を言ってから、教室に入る。

入った瞬間、私は沢山の視線を浴びる。

いや、最初は彼を見てから、私を見る。

私に嫉妬しているのだろう。

それはそうだ。

彼は美しいからな。
彼の世話をするというのは羨ましいだろう。
仕方ない。

中には彼を視姦するものもいるから、こちらはどうにかしなければと思う。

彼を彼の席に連れていき、私は前の席に座り、彼を見る。

あぁ、なんて綺麗なんだろうか。
白い肌、澄んだ瞳、水気を含んだ唇。
どれをとっても美しく、そして可愛らしい。

首筋にあるあのマークが見えなければ、もっといいのに…。

やはり、あの女は憎い。

強欲（後書き）

次回も投稿できるよう頑張ります！

たぶん明日…。

いや明日に投稿します！

希望（前書き）

五話目です。

こういう前書きって邪魔ですか？

希望

キーンコーンカーンコーン

学校の鐘で我に帰る。

どうやら、彼の顔に見惚れていたようだ。

先生が教室に入ってくる。

仕方なく私は自分の席に戻る。

彼と私の席は離れているのだ。

一度抗議したのだが、さすがにそこまで特別視できないとのことだった。

どうせ、彼女だけ彼を独占するのは許さないなどがあったのだろう。

やはり、私は嫉妬されているらしい。

遠い席から彼を見つめる。

まだ、後ろの席で良かったかもしれない。

前の席であれば彼を見ることができないからな。

まだ良かった方だ。

できれば隣が良かったが…。

まぁ、仕方ない仕方ない。

「じゃあ今日も一日頑張りましょう。」

見つめている間に話が終わっていた。
何を話したのだろうか？
別にどうでもいいか。

ＨＲが終わり、彼の元に行く。

というよりクラスメイトの全員が彼の周りに集まる。
皆、彼が治る瞬間を見たいのだ。
それ以外にも彼の顔を見たいという人間がいる。

少し嫌だが、仕方ないことだ。
何度も言ってるが彼は美しいのだ。
だから仕方ない。

キーンコーンカーンコーン

鐘が鳴り、全員席に戻る。
そしていつも通り授業を受ける。

昼休みになって、先生に手伝ってもらい、屋上に行く。
そして鍵をする。
これで誰も入れない。

少し寒いが、彼に屋上の景色を見せるためだから仕方ない。

ここで昼食を食べる。
食べるところは見られて欲しくないから、鍵をかけたのだ。

屋上で秋の風にあたりながら食事をする。

食事が終わったら、また先生に手伝ってもらい、教室に戻る。

戻ったら、彼を見つめる。

よく考えるとこの生活が始まってからもう半年は経った。
彼があの女に拉致・監禁されたのが彼が一年の秋だから、それから半年そのままで、助けられて私との生活が始まったの半年前。
あの事件からは一年が経っているのだな。

時が経つのは早いものだ。
彼がいない半年間はとてもつまらなかった。
そのせいで学校生活が億劫になっていた。

今はまぁ、贅沢を言えば、またあんな風に笑いあいたいものだ。

希望（後書き）

感想などお待ちしております。
って言ってもまだ五話目ですから感想とかないですよね…。

温情（前書き）

六話目です！

サブタイトルはあまり気にしないでください。

作者の「こんなタイトルでいんじゃね？」っていう感じで決まってますから…。

しかし、二字熟語を考えるのが難しい…。

温情

今日の授業が終わり、放課後になった。
また先生に手伝ってもらって、学校から出る。
帰る途中に彼としっかり話をする。
おかげで独り言が得意になってしまった。
遠回りをして、景色を見る。
それについての感想を私が言う。
そして彼は変わらない顔で虚空を見つめる。
彼の目に映るものはなんなのだろうか？
彼の耳に聞こえる音はなんなのだろうか？
彼の心に響くものはなんなのだろうか？
それが分かれば、彼は治るのだろうか？
治って欲しいと願いながら帰路に着く。
途中に鋭い視線を感じた。
私を見てる視線。
彼ではなく私を…。
これも嫉妬だろうか？
いや、何か禍々しい感じがする。
…彼を奪う気だろうか？
そんなことは絶対させない。
絶対守ってみせる。

家に着き、彼を車椅子から普通の椅子に座らせる。
それから私は向かいの席にすわり、彼を見つめる。
いつもと変わらない顔立ちだ。
やはり、美しい。

夕食を作り、食べる。
それが終われば今度はお風呂だ。
またあの女が彼に付けたものを見るのかと少し憂鬱になる。
しかし、彼のためだと自分に言い聞かせる。

一緒にお風呂に入り、彼の体を見る。
傷やおびただしい数のキスマークや注射痕がなかったとしたら、女の子も羨むような体だろう。
やはり美しい。

お風呂から上がり、パジャマを着せる。
そして布団に寝かせる。

私は机に座り、勉強をする。
彼が治った時には私が勉強を教えるためだ。

時々、彼を見ながら、教科書やノート、参考書に目を向ける。
私は彼に敵わないにしても、それなりに頭がいいことを自負している。

勉強を終え、彼と共に寝る。
彼が温めてくれた布団はとても暖かい。
私は彼を抱きしめ、彼の開いている目を閉ざさせ、すぐに闇の中に意識を投げた。

これが私と彼の一日だ。

温情（後書き）

まだまだ頑張ります！

感想などお待ちしております。

無力（前書き）

七話目です！

寝不足が…。

無力

彼を助けた時、彼はボロボロで涙を流していた。
その時の彼を見た時の変わらない美しさに私も涙を流した。
発狂して暴れ狂っている彼を押さえて、抱きしめた。
そしたら、彼は鎮まった。
抱きしめた時、彼は冷たかった。
私で暖めてあげたくなった。
壊れてしまいそうな彼を優しく、でもしっかりと抱きしめた。
そしてお姫様だっこをして、彼をこの忌々しい地下室から助け出して、そこにあったソファーに座らした。
彼はまだ泣いていた。
しゃっくりをあげて、泣いていた。
儚げで、でも美しくて、私もまた泣いた。
体に付けられた傷を見て、あの女を恨んだ。
憎んだ。
ここまで彼を壊した女を私は恨み、憎んだ。
時間が経った頃にあの女が帰って来た。
あの女が家に入って来た直後に私が呼んでおいた警察に取り押さえ

られた。

だがあの女は抵抗して、叫んだ。

彼は！？彼は無事なの！？あなた達、彼を奪いに来たのね！！私の彼は渡さない！！彼は私だけのものなんだから！！返して！！私の彼を返せぇぇぇ！！

と叫んだ。

それを聞いた瞬間、彼は怯え出した。

耳を手で塞いで、震えていた。

ソファーから落ちてまた暴れた。

そして彼もまた叫んだ。

なんでぇぇ！？僕は助けられたんじゃないのぉぉ！？なんでまだ僕は地下室にいるのぉぉ！？誰か！！誰かぁ！！助けてぇ！！嫌だぁ！！嫌だよぉぉ！！

私は呆然としていた。

ここは地下室ではない。

なのに彼はここが地下室だと言った。

幻覚を見ている彼はまた暴れ狂った。

尚もあの女が暴れて叫んでいた。

それに比例して彼も叫んだ。

うわぁぁあぁぁあ！！誰かぁぁ！！助けてぇぇ！！もう嫌だよぉぉ！！もう嫌だぁぁ！！もう何も、何もいらないからぁぁ！！誰か助

けてぇぇ！！僕を救ってよぉぉ！！

私は彼を押さえようと、彼に触れた。
今思えばあの行為が彼を加速させたのかもしれない。

彼はそれを弾き、叫んだ。

嫌ぁぁぁぁぁ！！触るなぁぁ！！僕に触れるなぁぁ！！もういらない！！もう何も！！もう何も見えなくても、聞こえなくても、感じなくてもいい！！もう何もかも！！全部！！消えろぉぉ！！

そう叫んだ瞬間、彼の開ききった目の中の瞳が動きを止め、体も動きを止めた。
耳を塞いでいた手は力が抜けて、ダランとぶら下がった。

この時、彼は人形になった。

無力（後書き）

感想などお待ちしております。

お気に入りにしてくださった方、ありがとうございます。

夢想（前書き）

こんな未熟者の駄文を読んでくださってありがとうございます。

夢想

私は目を覚ました。
息は荒々しく、涙が流れていた。
胸を押さえて、息を整えた。

またあの夢だ。
彼が人形になった時の、彼の心が砕けた時の、夢をまた見てしまった。

私はあの時、無力だった。
何もできなかった。
彼の心にとどめを指したのは私ではないのかと、今でも思う。

あの時、私が彼に触れなければ彼は壊れなかったかもしれない。
その前に早く助けていれれば良かったのかもしれない。
あの女に彼が呼ばれた時に助けれれば良かったのかもしれない。

今、後悔しても仕方がない。
だが、後悔してしまう。

あの時、彼は全てを拒絶した。
私も含めた、彼はこの世界にある全てを拒絶した。

もう彼に届くものはないのかもしれない。
この世界の全てを拒絶したのだから…。
何かないのだろうか？
彼が拒絶しきれなかったものがないのだろうか？

もしあるとすれば…。
たぶん親だろう…。

彼の親は彼が中学生の時に死んでいる。

不幸な事件だった。

私も葬式に出席した。

一番の理由は彼が心配だったからだ。
だが、その考えは杞憂に終わった。

親を亡くしたというのに泣かなかった。
いや、私が見ていないところではの話だが…。

彼は私に笑顔を見せたのだ。
その時から彼は美しかったから、その笑顔は私に効いた。

彼は笑顔を見せた後、すぐに親戚の人に呼ばれて行った。
彼は親戚の人に家に来るか？などと聞かれていた。
その時、私は彼のことを諦めかけた。

しかし、彼はその申し出を断った。

その好意だけ受け取っておきます。一人でも大丈夫です。

と力強く言った。

この時、私は彼がすごく大きく見えた。
私よりも背が低いのに、その背中はすごく大きかった。
私はまた彼に惚れた。

夢想（後書き）

感想などお待ちしております。

傲慢（前書き）

そろそろ前書きもやめようと思います。

書きたいことがあったら、書きますけど…。

傲慢

それから数日が経った頃に、彼は学校に来た。
今までの彼が嘘みたいに沢山笑顔を振りまいた。
以前の彼はそれこそ最小限にぐらいしか笑わなかったのに。
でも、その変化のおかげもあって、皆が彼の周りに集まった。
元々はクラスメイトぐらいが彼の周りにいたが、いつの間にか、上級生も下級生も先生までもが彼の周りに集まった。
なぜ彼がこのような行為を行ったのかの理由は完璧にはわからない。
だが、一つの仮定が私の中でできていた。
たぶん彼は“愛”が欲しかったんだと思う。
彼はいつも“愛”を与えられていた。
しかし、形を以て見ることができたのは“親”の“愛”だけだった。
“親”は彼に形のある“物”をあげていた。
それが彼にとっての“愛”の形になったのだろう。
誰しも形が見えなければ不安になる。
だから彼は“親”の持っていた、見える“愛”を違う人に求めたのだと思う。
たぶんどんなものでもいいという訳じゃなく、彼は見える“愛”だけを求めた。

ゆえに告白をされても断っていた。
“言葉”は見えないものだから…。
“文字”ではその愛してくれている人が見えないものだから…。

たぶん一番彼にとって嬉しいことはバレンタインだったんだと思う。
チョコという形でもらえる“愛”。

証拠にその日はいつも嬉しそうだった。
そのことを私に自慢してきたしね…。
嬉しそうに話す彼を見て、少し辛かった。

そして高校生になって、彼は少し考えを改めた。

人の視線に気を使うようになったのだ。

今までは気づかなかった、自分を見る視線。
これが少し怖かったんだと思う。

証拠に私に相談しにきた。
でも、私は何も言わなかった。

だってその視線の一つは私のものなんですから。

傲慢（後書き）

感想などお待ちしております。

本当にお願いします。

この後書きもやめようと思いますので…。

悲観

彼は悩んでいた。
なぜ視線が自分に向いているのかを。

彼は自分の美しさに気づいていないのだ。
誰よりも輝いているから人はそれを見たいと欲する。

あの女はたぶん、他の人間が彼を見るのが許せなかったんだと思う。
自分だけが独占したいと思い、歪んだ“愛”を彼に与えた。

しかし、彼が欲しいのはそんな形の“愛”ではない。
情欲でも独占欲でもない。
だから彼は欲しくもない“愛”を与えられて、パンクしたんだと思う。

彼は悩んだまま、その年の秋に消えた。

最初は疑問に思っていたが、病欠とのことだった。
お見舞いにと家に行ったが、誰もいなかった。

それはさすがにおかしいと思い、彼を捜索するが、証拠がないために難航してしまった。

それでやっとあの女の家にいるとわかったのは半年後だった。

遅かった。
結果、彼はパンクしていて、心を失った人形となってしまった。

水を与えられて続けたら花は枯れてしまう。
それと同じことが彼に起こったのだ。

…そうか。
今、私は気づいた。

たぶん今も彼は“愛”を欲しているのではないのか？
では親と同じように“愛”を与えれば…。

という考えに至ったわけだが…。
残念ながら彼は人形になっている。
認識できなければ意味がないではないか…。
それにこれは仮定であって確立したものではない。

私は嘆息した。

こんな長々しく過去を振り返り、現実逃避をしたところでやはり無意味なのだ。

また嘆息する。

仕方ない。
もう起きることにしよう。

とその前に…。

「おはよう。」

恒例となっている挨拶。

「…おはようございます。」

そして今日も彼は挨拶を返してくれるのだ。

あぁ、なんと幸せなことか……えっ？

「えぇぇぇぇぇぇ！？？」

私の絶叫が全世界に響いた。

悲観（後書き）

“彼”が目覚めました。

急展開ですよね。

まぁ、これからどんどん書き方が変わっていくと思います。

感想など、お待ちしております。

歓喜

叫んだ私はまず落ち着くために…。

「落ち着け、落ち着くのよ私、落ちちゅけ。」

…噛んだ。

声を出した方が私は平常心を保てるのだが裏目に出てしまった。

声を出す時点で恥ずかしいのに、さらに恥ずかしくなった。

「大丈夫ですか？」

その優しさが痛い…。

「あ、あぁ、大丈夫だ。」

「良かった…。」

彼は笑顔で安堵してくれた。

だけどその次の言葉は…。

「それで、えっと、どなたでしょうか？」

私を固まらせるのには十分な言葉だった。

再起動にはかなりの時間を有した。

いや、数秒ほどなのかもしれないが…。

記憶喪失…。
私は愕然とした。

いや、待てよ…。
ある意味好都合ではないか。
彼にとってあの記憶はない方がいいし…。
うん、別にいいんじゃないか？
いや、しかし…。

「あの…。」

彼に呼ばれたので思考を一時中断する。

「お姉様、でしょうか？」

「……えっ？」

今、彼はなんと言った？

お姉様？
私が？
いや、嬉しいですが…。

「いや、姉ではない。」

とりあえず返答をしておかねば…。

「じゃ、じゃあ家族ですか？それとも友達ですか？」

その問いの中に『彼女』という選択肢はないのだろうか…。

いや、彼女になれたら嬉しいけども…。

「一応友達、だな。」

嘘を言っても無駄なので本当のことを言っておこう。

「友達…。分かりました。それで、あの、ここはどこですか？」

「ああ、ここは私の家だ。」

「そうなんだ…。えっと、なぜ僕は君の家に？」

うーむ、それは返答に困るものだな…。

「君の世話をするためだ。」

とりあえずこう答えておこう。

「お世話？どういうことです？」

「君は意識不明だったのだよ。」

少し嘘をつく。

意識がないというのは本当だからな…。

「意識不明？」

「まぁ、ほぼ植物人間状態だったが…。」

「植物人間！？」

「あぁ、今から説明しよう。」

私は一通り説明した。
あの女に関わったことはとりあえず言わないで、手足はほとんど使えないこと、監禁された恐怖で精神病になり、悪化して植物人間状態になった、と。

忘却

「…そうだったんですか。」

彼は少し驚いた顔で言った。

「じゃあ、貴女には感謝しなければいけませんね。えっと、ありがとうございました。」

「いや、別にお礼を言うことじゃない。私がしたいからしただけだ。」

そう、私がしたかった。

ただそれだけ…。

我が儘を言って無理やりしただけ…。

「はっ！時間が…。急いでご飯を食べるぞ！」

「えっ？ちょっ…。」

無理やりお姫様だっこをして、椅子に座らせる。

「そこで待っていてくれ！すぐ作る。」

「は、はい…。」

「それじゃあ、いただきます。」

「い、いただきます。」
彼は箸を取り、食べようとするが…。
すぐ手から落ちた。
「「あっ…。」」
そうだった。
手に握力がなかったんだった…。
「す、すまない。」
「す、すいません。」
二人同時に言う。
さらに気まずくなる…。
こんなことを忘れてしまうなんて…。
私のバカ！
「あの、どうやって食べればいいんでしょう？」
「ど、どうする…。」
本当にどうしようか…。
口移しなんて彼は嫌がるだろうし…。
それにそういう行為が彼の記憶を蘇らせれば…。
……想像もしたくない。

「あの、僕が植物人間状態だった時、どうやって食事してたんですか？」

そ、それは今、言いたくないんだが…。

…仕方ないか。

「く…。」

「く？」

「口移し…。」

は、恥ずかしい！

たぶん私の顔は真っ赤だろう…。

気になってチラリと彼を見る。

目を見開いて、彼も真っ赤になっていた…。

か、可愛い…。

忘却（後書き）

感想などお待ちしております。

膠着

「く、口移しですか…。」

顔を伏せて彼が言う。
耳まで赤くなってる…。

「そ、そんなショックか？」

そう言った瞬間、顔を上げた。
まだ真っ赤な顔だけど…。

「い、いえ。す、少しびっくりしただけで…。い、嫌という訳では…。」

なんだ、この生物は…。
なんだか苛めたくなってきた…。

「そうか…。そんなにショックだったか…。」

「い、いえ。う、嬉しいです…。あ、貴女のような綺麗な人に口移しで食べさてもらえてたなんて…。」
「じゃあ、してやろうか？今…。」

間髪入れず問う。

「ふぇ？」

「今してやろうか？く・ち・う・つ・し。」

ボンと真っ赤になり、彼はヘナヘナと机に突っ伏した。
い、苛めすぎたか？
罪悪感を感じる…。
あっ、復活した。
「せ、せめてあーんとかにしてください！」
あーんならいいのか？
とツッコミかけた。
まぁ、結果としてあーんで食べさした。
その時の彼はとても可愛いかった。
「それでは学校に行くか…。」
よく考えたらこんな時間になってる…。
「あっ、そうですね。いってらっしゃい。」
「何を言ってるんだ？君も行くんだぞ？今までそうしてきたしな。」
「へっ？植物人間状態だったのに行ってたんですか！？」
何かおかしなことを言ったか？

「あぁ、私が連れていっていた。」

「……なぜですか？」

愚問だな…。

「君が学校というキーワードで治るかもしれないと思っていたからだ。まぁ、実際、時間が経てば治るものだったみたいだが…。」

こうやって話すことまでできてるしな…。

「……今さらですけど、普通、僕って病院にいるものじゃないんですか？」

なんだ、そんなことか…。

「あぁ、それは病院を買収した。」

「…えっ？」

「私の親は金持ちだからな…。」

「初耳ですけど…。」

そういえば言ってなかったな…。

「まぁ、話してないからな…。そうだ、着替えをしなきゃな。」

楽しみを忘れていた。

「えっ？」

彼は固まった。

悪戯

固まった彼をまたもお姫様だっこで抱える。

お姫様だっこをしたことによって彼は正気に戻った。

「あっ、今日学校行くのはちょっと…。」

「どうした？調子が悪いのか？」

また苛めたくなってきた。

「は、はい。体調が悪いので今日は休みたいです。」

「そうか。病院に行かなければならないな。」

助け船を出したと思わせて…。

「そ、そうです。病院行きましょう。病院。」

「私服に着替えなければな…。」

突き落とす。

「へっ？あっ、いや、きゅ、急に元気になってきました。」

「そうか。では学校に行こう。」

「あぅ。うぅぅ。」

私の楽しみは逃さないよ。
ふふふ。
彼は諦めたような顔をして、腕を私の首に回して、顔を隠した。
少し震えている。
「えっ、えっと、や、優しくしてください。」
何か違う気がする…。
しかし、その恥じらいがいい…。
やはり、可愛い…。
「任せておけ。」
私は脱衣所に直行した。

「あの…。」
着替えの最中に彼がはなしかけてきた。
「僕の体にあるこの赤いマークみたいなのはなんですか？」
「…それは。…気にするな。」
今、一番聞かれたくなかった…。
「は、はぁ。」

彼はやはり気になるみたいだ。
手で触ってみている。

つまんだりはできないから、刺激することはない。
だから、そこは安心できる。

着替えが終わり、私は彼をまたお姫様だっこをして、車椅子に乗せ、家を出た。

いってきますと彼は律儀に言った。

最悪

「紅葉が綺麗だな。」

昨日言った台詞をまた言う。

「そ、そうですね。綺麗だと思います。」

昨日までと違うことは彼が返答してくれること。

「まぁ、君の方が美しいがな。」

こうやってからかうこともできる。

「ふぇ？あ、ありがとうございます。」

それに対する反応がやはり可愛い。

顔を真っ赤にするところを見るなんて本当に久しぶりだ。

こんなやりとりをしている間に学校が見えてきた。

「ほら、あれが私たちの学校だ。」

「お、大きいですね。」

「そうか？私の本家よりかは小さいが…。」

「……あれよりも大きいってどういうことですか…。」

「金持ちだからな。」

「…忘れてました。」

そんなやりとりをしている間に校門前。

待っていた先生がこちらにやってきた。

「あの人、誰ですか？」

と彼が問う。

「あの学校の中で一番信頼できる先生、だな。階段を上がる時などに手伝ってもらっている。」

「へぇー。君に一番信頼できる先生と言われるなんて嬉しいな。」

いつの間にか、目の前まで来ていた。

「本当のことですよ。」

「…そんなことよりも、目覚めたのかい、彼は？」

「あっ、お世話になってます。」

「あぁ、別に構わない。しかし、驚いたな…。昨日まで本当は人形なんじゃないのか？と疑っていたが…。」

「先生、ちょっと話があるので来てください。」
先生を連れて、少し彼から遠ざかり、彼の現状を伝える。
先生は少し驚いた顔をしたが、すぐに真剣な顔になった。
「そうか。記憶喪失か…。」
「はい。少し予想外なことです。」
「だが、君にとっては好都合じゃないのか？彼は覚えてない方がいいと思うが…。」
「まぁ、確かにそうですね。ですから、彼の記憶を刺激させるようなものをできるだけ隠しておきたいのです。」
「それで、俺が先に先生方に伝えておいてほしいということか…。」
「はい。お願いします。」
「あぁ、わかった。」
よし。これでいい。
と思って振り返れば…。
…彼がいない。
どういうことだ？
「わっわっわ！」

彼の声が聞こえた。
そちらの方を向いてみると…。
彼の車椅子がもうスピードで坂を下っていた。
サイドブレーキを入れるのを忘れていた！！
私も駆け出した。
くっ！
手遅れか？
と思いながら走る。
追いつけない。
距離が開いていく。
もう坂が終わってしまう！
と思った時に彼の車椅子が動きを止めた。
誰かが止めてくれた。
やっと追いつき、息も絶え絶えでその止めてくれた人に…。
「ありが、とう、ござ、います。」
と礼を言った。
「いえいえ。気をつけてくださいよ。彼が怪我してしまったら困りますからね。」

聞き覚えのある声…。

私ははっとしてその声の持ち主の顔を見た。

それは…。

あの女だった…。

楽観

「なんでお前がここにいる！！」

私はあの女を睨み付ける。

「んー。結論だけ言いますと私の家はお金持ちなのですよ。」

「なっ、彼を壊したというのに罪にならなかったというのか！？」

くそっ！信頼できる警察を使ってこのざまか！！

「まぁ、家で謹慎処分を受けましたよ、一月ほど。」

「一月ほどだと！？そんな簡単なもので終わらしていいものじゃない！！」

「まぁ、そんなに怒らないでくださいよ。こんなところでこんな話して、彼の刺激になって思い出したらどうするんですか？」

私ははっとして彼の方を向く。

彼はキョトンとした顔で私達を見ていた。

そして私は疑問が生まれた。

「なぜ、お前が彼の現状を知っている？」

「言ったでしょう？私の家は金持ちなのですよ。」

あの女は私を馬鹿にするかのように嘲笑った。
私のストレスが限界点を突破しかけた時…。
「あ、あの、なんの話をしてるんですか？」
彼によって私は我に帰る。
「な、なんでもない。」
咄嗟に出てきた一言、これしか言えない。
彼が言及してきたら逃れようがない。
「そうですか？」
「あ、あぁ、なんでもない。」
「そうですか。まぁ、今はそんなことより急ぎましょう。学校に遅れますよ。」
「あぁ。」
「彼に救われましたね。」
私によってきたこの女は小声でこんなことを言いやがった。
イラつく！

「そんな怖い顔で見ないでくださいよ。」
「お前のせいだろ！」
「二人とも！喧嘩はダメですよ？」
「ぐっ！」
「わかってますよ。」

不変

結果として、私達は学校を遅刻してしまった。

当然といえば当然の結果かもしれない。

なぜなら、どちらが彼を担いで、階段を上がるかを言い争っていたからだ。

まぁ、その言い争いも彼の喧嘩しないでください発言により終止符が打たれた。

結果、先生が彼を担ぎ、私が車椅子を持つということになってしまった…。

あの女はあの女で担がれている彼と仲が良さそうに話をしてるし…。

大体、あの女にとっても彼には思い出してもらいたくないはずだ！

なのにあちらからそれを掘り返そうとしている…。

訳がわからない！

しかも驚いたのはこの後だ。

あの女が私達のクラスに編入してきやがった。

この前は隣のクラスだったというのに…。

その前に確か、退学させられたんじゃなかったのか！？

それについて聞いてみたら、また同じように「金持ちですから。」

と言いやがった。

あぁ、もう、イラつく！

私の家も同じようなものだが、ここまで親の脛をかじったことはないぞ！？

どんだけ甘やかしてるんだ！

あの女の親は！

子どもがあれなら親も駄目なのか！

とこんな風に愚痴っていても仕方ない。

はぁ、と私は嘆息した。

どうするか…。

…今のところは彼に何もしていないが、いつ、あの時のように同じことが起こるかわからん。

徹底的に監視するしかないか…。

「大丈夫ですか？」

と彼が心配してくれるが、そんなことよりも私はそんな彼の姿を見て、また嘆息した。

はっきり言うと、全然変わってないのだ。

親しい人間ぐらいにしかわからないだろうが、彼の本質は全然変わってない。

むしろ、昔の彼に戻ったみたいだ。

彼の親がいた頃みたいに…。

無能（前書き）

ユニーク１０００突破しました！

ありがとうございます。

これからも「前途多難です…」をよろしくお願いします。

無能

学校に行ってわかったことだが、記憶喪失になったことによって、全てを忘れただろう、と思っていたが、どうやらあの頭脳は残っていたようだ。

どうやら彼の記憶は人に関するものだけ消えているようだ。

…私のことは覚えていてほしかった。

とまた愚痴を言っても仕方がない。

今、彼は寝ている。
私の目の前で…。
目の保養になる彼の寝顔…。
おっと、涎が垂れている。
拭いてやろう。

私はハンカチを出して、彼の口周りを拭いてあげようと思ったら…。
私と同じような行動をしているあの女が視界の片隅に見えたので、あの女の方を向いて、ニコリと笑顔を見せて、こう言ってやった。

「まず、お前は帰れ。」

そう言ってやったら、あの女もニコリと気色悪い笑みを見せて…。

「私が貴女の代わりをしますから、貴女が帰りなさい。」

こう言いやがった。

「彼の世話は私がする。お前に任せれるか。」

「貴女なんかより、数倍私の方がマシですわ。」

「彼を壊した奴が言える台詞か？」

「改心しましたから。」

「改心ねぇ。信じられないな。」

「貴女に信じてもらわなくても結構ですわ。それに私がした事は一般では知られてませんしね。」

そう、私も疑問だったんだ。

あの事件は一般に知られていたのかを…。

あの後、ニュースを見て、報道されていなかった…。

裏に何かあるのかと思ったが、あの時は私も忙しかったから、何もできなかったし…。

まぁ、今あの女が言った通り、一般では知られず、闇の中ということとか…。

どうせ、金の力だろうが…。

「ふぁー。…あれ？どうしたんですか？」

「なんでもないよ。」

あの女は金にしかすがれない、能無しだってことだな…。

混沌

放課後…。

彼と私は途方に暮れていた。

雨が降っていたのだ。

「どうするんですか？傘、持ってきてないですよね…。」

「あぁ、すまない。今日はバタバタしていて、予報を見るのを忘れていた…。」

「……。」

「し、仕方ないだろう。き、君が急に目覚めてしまうから…。」

「…すいません。」

「い、いや、君のせいという訳じゃなくてな…。」

「お嬢様、お迎えにあがりました。」

「ご苦労様です。」

…あの女、いつの間に執事なんて呼んでいたんだ？

「あら、帰らないのですか？」

「「……。」」

「あぁ、傘を忘れたのですね。…乗りますか？」
「お前の手助けなどいらない！」
「えっ？乗せてもらった方がいいんじゃないですか？」
あの女の車に乗ってみろ、確実に彼ごと誘拐される…。
ここは絶対に乗らない方がいい。
「いや、私が車を呼ぶから問題はない。」
最初からそうすれば良かった…。
「あら、そうですか？それでは、また明日。」
「さようなら。」
「……。」
案外、あっさり退いたな…。
本当に改心したのだろうか？
いや、これもあの女の策略かもしれない…。
家に到着した…。
「帰りました。」
彼は律儀に言う。

「ふぅ。」

今日はすごく疲れた。

彼が目覚めたのは嬉しいが…。
あの女が帰ってきた。

昔、私達は友達だったのに…。
一体、いつから彼の取り合いになっていたのだろう？
最初からか…。

私もあの女も、彼と遊びたくて、独占したくて…。

彼を引っ張りあいもしたな…。
最終的に彼が痛がって、泣いたんだったな…。

…今はもう昔の話だ。

彼は渡さない。
誰にも…。

至高

「ほら、口開けて。」

「うぅ。やっぱり、これで食べなきゃダメですか？」

「口移しの方がいいか？」

「あ、あーん。」

「ふふふ。」

今は夕食。

一日で一番幸せな時かもしれない。

顔を赤くしている彼を見るのは本当に幸せだ。

「はい、次。口開けて。」

「みゃ、みゃだきゅちに、ぷぎゃ。」

「ふふふ。」

「むぐぐ。酷いです。」

「ふふふ。可愛いよ。」

「…ありがとうございます。」

顔背けてるけど、逆にそれで耳まで赤いのが見えちゃってる。
とても微笑ましい。
「はい、次いくよ。」
「むぎゅ。だ、だから口に突っ込まないでください！」
「ふふふ。別にいいだろう。」
「良くないです！」
「反抗期？躾が必要かな…？」
「反抗期じゃないです！犬じゃないんですから、躾もいりません！」
うぅむ。ではどうしようか…。
まぁ、いいや。
「はい、次。」
「だから、話を聞いてくださいって言ってるじゃないですか！ふぎゅ。」
「仕方ないだろう。君が可愛い反応するからだ。」
「…どうしろって言うんですかぁ。」
「そうだな。口移しをしてもいいというなら、別にいいが。」

「…口移しはダメです。」
「じゃあ、仕方ないな…。」
「だ、だから、僕が言いたいのは…。ふぴゅ。」

「ふぅ。ごちそうさま。」
「…ごちそうさまでした。」
「今度は口移しするか？」
「しません！」
「ふふふ。」
「笑わないでください！」
あぁ、本当に幸せだ。

暗雲

「あの、一緒にお風呂入るんですか？」

「あぁ、そうだな。」

「うぅ。」

「まぁ、仕方ないだろう。君は一人にする訳にもいかないしな。」

「は、恥ずかしくないんですか？」

「いや、毎日だったからな。そういう気持ちはない。」

「……。」

「さぁ、行こうか。」

彼をお姫様だっこをして、風呂場へ…。

「あ、あの、目隠しとかありますか？」

「残念ながらない。」

「……。」

今度こそ風呂場へ。

彼の服を脱がしていく。
椅子に座っている彼は顔を真っ赤にしながら、その様子を見ている。
「あ、の、やっぱり、恥ずかしいです。」
「大丈夫だ。心配するな。襲ったりはしないよ。」
「そういう問題じゃ…。」
彼の言葉が途中で止まった。
「どうした?」
気になって、彼を見る。
彼の視線は鏡の方に向いていた。
右手で自分の顔を触っている。
「これが、僕の顔なんですね…。」
「あ、あぁ、どうした?」
「こんなこと言うと、自慢みたいですけど、綺麗だなって思ってしまいました。」
「当然だ。君は綺麗なんだよ。だから自信を持っておけ。」
「自信、ですか…。僕から見たら、この顔は他人の顔っていう感じがするんですよ。」

彼は続けて、こう言った。

「まるで、僕の存在が肯定されてないみたい…。」

「君の存在が肯定されてない、だと?」

「目覚めて、まだ一日目ですけど、わかるんです。皆、今の僕じゃなくて、昔の僕を見てる…。」

「……。」

「自分のことなのに、僕は何も知らないんですよね…。どんな性格だったんだろうとかどんな風に皆と接していたのかとか、昔の僕がどんな感じだったのか…。」

「今の君でいいよ。昔なんて考えなくていい。」

私は焦った。

彼が昔の自分を知りたがっている。

それは駄目だ。

あんなことは思い出さなくていい。

「…僕は、僕でありたいんですよ。」

「……。」

何も言えなかった。

彼の不安は大きなものだから…。

自分のことを知らないのは苦痛だろうから…。

でも、思い出さないでほしい。

今の君でいいから…。

今の君がいいから…。

だから、そんな悲しいことを言わないでくれ…。

暗雲（後書き）

感想などお待ちしております！

不安

風呂に入り終わり、彼を寝室に連れていく。

よく、考えると夜にいつもやっていた勉強はどうしようか？

彼に教える必要性はなかったからな…。

まぁ、いいか。

やろう。

あれはもう私の習慣だからな…。

とりあえず、彼を布団の中にいれる。

あの発言をしてから、彼は一言も発していない。

少し悲しそうな顔をして、そのままだ。

そんな彼を見ながら、勉強を開始する。

十分程したころに彼を見た。

目を閉じているところを見ると、寝ているのだろう。

私はもう一度、参考書に目を通した。

勉強が終わり、私は伸びをした。

背中の骨がバキバキと鳴った。

「終わったんですか？」
不意に彼が声をかけてきた。
「終わったよ。…寝たんじゃなかったのか？」
「寝てましたよ…。でも、何か、変な夢を見てしまって、起きちゃいました。」
私は不安になった。
もしかして、あの時のことを夢で見たのではないか？と。
「でも、どんな夢だったか忘れました。変な夢だったっていうのは覚えてるんですけどね。」
「あ、あぁ、そうか。」
良かった。
何にせよ、忘れてくれていた方がいい。
「さぁ、それじゃあ、寝ようか。」
「…寝るのも一緒なんですか？」
「当たり前だろう。私にどこで寝ろというのだ。」
「じゃあ、僕が床で寝るので、布団、どうぞ…。」
「…ダメだ。」

「…ですよね。」

私は布団に潜り込み、彼を抱きしめた。

「わっわっ。な、なんで抱きしめるんですか？」

「私は何かを抱きしめなければ、寝れないんだよ。」

「…僕が寝れないんですけど。」

「何か言ったか？」

「な、なんでもないです。」

顔を赤くしている…。

可愛いな…。

「それじゃあ、おやすみ。」

「お、おやすみなさい。」

恐怖

「んっ…。」

目が覚めた。

今、何時だ？

…三時か。

少し早く起きてしまったな…。

どうするか…。

ふと、自分の腕の中にいる彼を見た。

可愛い寝顔…。

やはり、美しい。

目元に何かが光ってるように見えた。

…涙？

泣いているのか？

「へっ？」

突然、彼が私に抱きついてきた。

…震えてる？

「ごめん、なさい。」

「えっ？」

「ごめ、ん、なさ、い。」

彼が謝っている。

…なぜ？

まさか、夢であの時のことを見てるのか？

「こ、わ、いぃ。」

彼の抱きしめる力が強くなった。

少し痛い。

何がだ？

何が怖いんだ？

彼は一体、何に怖がっている？

私は彼の背中をさすりながら、こう言った。

「大丈夫だ。大丈夫だから…。私が付いてる。だから、安心しろ。怖いものなんて何もない。私が守ってやる。」

彼は寝ていて、聞こえない筈だったが…。

抱きしめる力が弱まった。

少しして、過呼吸気味だったのが、すぅすぅとテンポのいい寝息をたてている。

「ふぅ。」

私は安堵して、流れている彼の涙を舐めた。
少ししょっぱかった。

「おはよう。」

「おはよう、ございます。」

しばらく時間がたって、彼が起きた。

「よし、ご飯食べるか…。」

「あ、はい。」

昨日と同じく、彼をお姫様だっこをして、椅子に座らせる。

昨日と同じように、ご飯を食べさせる。

彼を着替えさせる。

また、今日も一日が始まる。

できれば、いい日になるといいなと思いながら…。

再演

あれから数日が経った。
彼は学校に慣れたようだ。
笑顔も増えて、周りの人間を幸せにしている。
だが、家に帰れば、なぜか暗い顔をする。
その理由を聞いてみたら、悲しい顔で…。
「今日も、何も思い出せませんでした。」
と言った。
彼の中でどんどん不安やストレスが溜まっていっている。
どうにかしたい…。
だから、私は…。
「大丈夫だ。思い出さなくても、君は君だから…。」
そう言ったら、彼は頬がひきつった笑顔で…。
「ありがとうございます。」
と言った。
悲しくなった。
私は彼を助けたい。
守るだけじゃなく、救いたい…。

その気持ちがどんどん強くなっていくのがわかった。

今日もいつも通り、学校が終わり、家に帰った。

最近、あの女から何も言ってこない。
遠くから彼を見て、顔を赤らめている。
まるで、恋している乙女だ。
いや、恋をしているのだが…。

今は夕食の時間。
彼といつも通り、食事をしている時、それは起こった。

「はい。あーん。」

「あ、あーん…。」

彼の口の中に入れようとした、瞬間、彼の目の色が変わった。

「どうした？」

「うわぁぁぁぁ！！！」

彼は私の手を弾いた。

私が持っていた箸はとび、ご飯が周りに散った。

彼は椅子から転げ落ち、何かから逃げるように後退りした。

「ど、どうした？」

「はぁ、はぁ、はぁ。」

明らかに過呼吸。
瞳孔が開いている。

「虫ぃぃぃ！！！」

この発言で確信を持った。
幻覚だ…。
もしかして、昔のあの麻薬が残っていたのか？

「ひぃやあぁぁぁ！！！」

まるであの時と同じ。
彼が壊れた時と同じ！！

私の中のトラウマが蘇る。

助けたい。
でも、助けれない。
私の無力…。

あの時と同じ。
私は彼に何もしてやることができないのか！？

無情

結局、私は何もできず、彼が気絶するまで立ち尽くしているだけだった。

彼が気絶した後、寝室へ連れていき、壁にすがらせておいた。

彼が目を開けたのはそれから三十分程した時だった。

私を見て、発した言葉は…。

「あっ、虫、は…？」

だった。

私はどうすればいいのかわからなかった。

彼にどういう風に接すればいいのかがわからなくなってしまった。

だが、私は無意識に…。

「私が退治した。だから、大丈夫だ。」

と言ってしまった。

それを聞いた時の彼の顔は弱々しくて、儚くて、悲しい笑顔だった。

私もそれを見て、笑顔を見せた。

自分でもわかるほど、ひきつった笑顔だったと思う。

それは幻覚だと言ってしまえば良かったのかもしれない。
だが、私にはこれしか言えなかった。

無意識に私は彼を抱きしめた。
彼もそれを受け入れて、私の腰に腕を回した。

私も彼も震えていた。

私は悲しみから来る震えで。
彼は恐怖から来る震えで。

もしかしたら、私はどこかで間違っていたのかもしれない。

そのせいでお互いが傷ついている。

彼を守りたい。
でも、それはただの願いで…。
彼を守れていない。
その無力感で辛くなった。

「僕に、何があったんですか?」

不意に彼が話かけてきた。

「貴女なら、知っているんじゃないですか?教えてください。」

「…教えれない。」

それはできない。

それはしてはいけない。

「なぜですか！？」

彼は声を張り上げて言った。

予想以上に大きな声だったので、私はビクッとしてしまった。

「あっ、すいません…。」

その後はお互い、何も言わず、同じ布団に入り、寝た。

空気が気まずくなったまま、今日は終わってしまった。

思考

朝、私が起きた時には、彼はすでに起きていた。

「おはようございます。」

「あ、あぁ、おはよう。」

何を言えばいいのかわからなかった。
彼に言いたいことはたくさんある。
でも、何を言えばいいのかわからなかった。

「朝ご飯、食べようか。」

「…そうですね。」

朝はいつも通りだった。

ただ、会話がなかった。

「今日は学校に行きたくありません。」

朝食を食べ終わった時に彼はこう言った。

「なっ、駄目だ！君は学校に行かないと…。」

「今日は！…とてもじゃないですけど、笑顔を作れません。」

「じゃあ、私も…。」

「一人にさしてください…。」

「な、なぜだ!?」

「…考えたいんです。自分のこと。たった一人で…。」

「だが、今、君を一人にすれば…。」

「僕を信じてくださいよ…。」

私はもう何も言えなかった。

彼がそれを望むのなら、仕方ない。

そう、仕方ない。

だから…。

「…わかった。」

「いってきます。」

…返事は返ってこない。

当然だ。

今、彼は寝室にいる。

寝室に私の声は聞こえないだろう…。

考えてみると、一人で登校するのは久しぶりだ。

何も考えずに歩いていたら、すぐ着いてしまった。

今日の学校はつまらなかった。

彼のことについて考えていたら、いつの間にか終わっていた。

まだ、答えは出ていない。

だが、今は彼を一人のままにしておくべきではないと思い、すぐ帰ろうと立ったが、それは止められた。

「今日は彼、来なかったんですね。」

あの女だった。

対峙

「今日は彼、来なかったんですね。」

「……。」

「私に何も言い返さないってことは彼に何かあったんですね…。」

「…あぁ、お前が彼に残してくれた遺物のせいでな。」

「私が残した？…麻薬ですか？」

「あぁ、壊れる前の彼に逆戻りした気分だよ…。」

それを言われたあの女は狼狽えて、頭を下げて、こう言った。

「すいません。」

私は驚いた。

こいつが謝るところなんて一度も見たことがなかったからだ…。

下げていた頭を上げて、こいつは続けて言った。

「私は、間違っていました。彼が欲しくて、彼を手に入れたくて、私は…。」

その目には涙が浮かんでいた。

今さら、泣いたところで…。

「私はあの日、告白したんです。彼に。」

それがどうした。
そんな話をして何になるんだ。

「彼と私と貴女は昔、友達でしたから…。まぁ、貴女とは、友達、というより恋敵でしたけど…。」

なんなんだ。
この女は…。
そんな昔の話…。

「貴女は気づかなかったんですね…。そんな昔から、彼は貴女に惹かれていたと思いますよ。」

えっ？

「彼はいつも貴女を見てました。だから、私は焦って…。たくさん、たくさん、アピールしました。でも、彼はいつも、私に振り向いてくれることはなかった…。」

えっ？えっ？えっ？

「今、思えば、私はそれが憎かったんですよ。憎くて、彼の視線を独り占めしたくなって…。」

「待ってくれ！」

「はい、なんですか？」

「惹かれていた？彼が、私に？」

「えぇ。私が告白した時、それが明らかになりましたけどね…。聞きます？私が告白した時の彼の返事…。」

私は首肯した。

それを見た、この女は少し微笑んで…。

「『ごめん。僕、君の気持ちには答えれない…。僕は、実は、彼女のことが好きなんだ…。もう、片思い歴、十年になりそうだけどね…。』って…。最後の方は微笑んでた。貴女が羨ましかったですよ…。」

それを聞いた時、私は、悩んでいた答えが決まった。

特権

私は立ち上がり、彼女を見る。

思えば、お互いにこんな風に真っ直ぐ向き合ったことがないかもしれない。

一呼吸置き、私は言った。

「どうやら、私の勝ちみたいだな。」

それを聞いた、彼女は少し笑って…。

「まだ、決まってないですよ。それに、彼が貴女のことを好きだったのは昔のことです。」

「そうだな。昔のことだな。」

私は薄く笑いながら、言った。

「だが、ありがとう。お前のおかげで気持ちが晴れた。」

「…貴女が私に礼を言うなんて、何か悪いものでも食べましたか？」

茶化すなと思った。

だが、今はこの気持ちが消える前に、彼の元に行くべきだと思った。

「本当にありがとう。」

「…どういたしまして。」

私は走り出した。

彼女が言いたかったことはたぶん、彼には私が必要だと言うこと。

彼女のこの決断は凄いと思う。

私では絶対にできない。認めれない。
彼を幸せにするのは私だと信じてるから。
その役を譲ることは私にはできない。

だが、彼女は認めた。
今、私にはそんな資格がないことを自分で認めることができた。

彼女の方が私より何倍も凄いのかもしれない。

悔しいが、それは認めざるを得ない。

家に着く。

ここまで走ってきてしまったせいで息が上がっている。
寝室のドアの前まで来て、呼吸を整え、ドアノブに触れる。

…少し怖い。
もし、彼が私を受け入れてくれなかったら…。
考えるだけで嫌気がさす。

…私は彼の“特別”になりたい。
そうなりたくて…。
私はここまで来た。

だが、悩む必要はなかった。
昔から、私は彼にとって“特別”だったのだから…。
だから、今、また私は“特別”になるために…。

私はドアを開けた。

悲鳴

私が寝室に入った時、彼は床で寝ていた。
布団は敷いておいたのにな…。
彼を抱き抱え、布団に寝かせようと思い、触れたら彼の目が開いた。
その目に輝きはない。
虚ろで絶望を持った目。
その目で私を見た。
泣いた跡があった。
私がいない間にまた、発症したのかもしれない。
「僕は、なんで、こんなに苦しまなければいけないのですか?」
彼は私に問う。
その声は震えていた。
彼の涙がまた溢れ、頬を伝い、床に落ちた。
私はただ黙っている。
「僕は、なぜ、手足が使えないんですか?」
彼はまた私に問う。
それの返答を私はしない。

できない。
今は彼の嘆きを聞いてやることしかできない。
彼の本当の気持ちを受け止めるために…。
「いいですよね、皆、幸せそうに笑えて…。貴女も、皆も、僕は羨ましいです。」
彼のその気持ちは嫉妬で…。
「立ちたい。歩きたい。走りたい。自分でご飯を食べたい。」
その願望は強欲で…。
「もう、何もかもが嫌です。」
それは世界に対する憤怒で…。
「僕は、どうすればいいんですか？これから…。黙ってないで教えてください。」
抱きしめたい。
それでも私は沈黙を突き通す。
「僕が教えてと言ってるんです。教えてください。」
沈黙を突き通す私を見て、彼は苛立ったのか、私を睨んだ。
そして叫んだ。
「教えろ！！」

その雰囲気に私は少し押された。
それでも私は沈黙を突き通す。

彼の体は怒りに震え、鋭い目付きで私を威嚇する。
息も荒く、肩で呼吸をしている。

「貴女は！貴女は！貴女は！貴女は！！僕に何も教えてくれないんですか！！？」

彼の目が狂気を帯びてくる。

「なぜ、僕はこんなに苦しまなければいけない！？なぜ、手足が使えない！？なぜ、皆は笑ってる！？なぜだ、なぜだ、なぜだ！！？」

叫びすぎたのか、彼は声が枯れてきた。

体は力が抜け、開いていた目は収縮し、涙が溢れた。

俯いたその顔をすべてに絶望したようだった。

「僕は、人並みの幸せが欲しいですよ…。」

最後にポツリと彼は言った。

「…それで全部かい？」

沈黙を突き通していた私が口を開く。

「えっ？」

俯いていた顔を上げて、私を見る。

その顔は絶望と疑問が入り交じった複雑なもの…。

私はそんな彼の目を見ながら言った。

「それで全部を吐き出せたかい？」

彼はまた俯き、言った。

「…心が重くなっただけです。」

「…そうか。」

私はそう言って、彼を抱きしめた。

「えっ？」

彼が驚きの声をあげるが、気にしない。

壊れてしまいそうな彼を、強く、強く抱きしめた。

「い、痛っ…。」

痛いだろうが、受け止めてもらう。

小さな彼を私の腕の中に包み込む。

「私は、君が好きだ。」

ポツリと彼の耳元で囁く。

彼は訳がわからないという顔で私を見ていた。

「過去の君も、今の君も、未来の君も、私は愛する。だから、だから、私を君の傍にいさせてくれ。私を拒絶しないでくれ。」

何が『だから』なのかはわからないけど…。

ただ、私はこう言った。

彼の体は小刻みに震えていた。

目からは涙が流れていた。

「ぼ、僕を、愛してくれるんですか？僕に“愛”をくれるんですか？こんな僕を？」

涙声だった。

「あぁ、私は君を愛する。」

彼はそれに安堵したのか、目を閉じた。

「嬉しいです。」

ポツリと彼は呟いた。

「今、僕はわかりました。僕は、“愛”が欲しかったんですね。じゃないとこんなに嬉しい筈がない。」

彼は続けた。

「そして、僕が本当に欲しかった“愛”は、貴女からの“愛”だったんですね…。僕は、貴女から、愛してもらいたかったんだ。もう、何もいらないです。貴女さえいれば、僕は、進んでいける気がします。」

「あぁ、進もう。私と共に…。私がずっと君の傍にいよう。」

私達はキスをした。
ただ、触れるだけのキスをした。
お互いの存在を確かめるために…。

朝が来た。

私は彼に挨拶を言い、彼は律儀に返した。

彼を抱えて、椅子に座らせ、食事をする。
会話が弾んでしまい、食べるのも忘れてしまう。
急いで着替えて、ドアを開ける。
今日もまた、私は彼の車椅子を押す。

深愛（後書き）

無理矢理という感じがいたしますが、これでこの話は終わりです。

読んでくださった皆様ありがとうございました。

後はあとがきにてお会いしましょう。

あとがき

「前途多難です…。」を読んでくださった皆様、心よりお礼申し上げます。

堅いなどとは言わないでください。
これだけ僕が感謝しているということです。

ですが実質、この終わり方は満足できないと思われます。

ですからいつか（本当にいつになるのだろうか…）改稿版として出させて頂きます。
一日一話ペースでしたので文字の間違いなどもあるでしょうし…。

さて、一応ですが、この作品は終わりです。

次の作品のことですが……。
主人公はもう考えているのですが、話が浮かんでおりません。

というより、どちらの主人公にするかと悩んでいるのです。

そこで、恐れながら、読者の皆様に、アンケートというものをしたいと思うのです。
前代未聞のことだと思いますが、主人公で決めていただこうと思います。本当に申し訳ございません。

まず一人目ですが…。
興味を持ったら、それに熱中する男の子。

しかし、冷めてしまえば、もうどうでもいいと思い、丸投げする。
それにより、自分の人生を棒にふりかけたり、人の人生を無茶苦茶にした経験がある。
容姿は男の娘（ご想像にお任せします）。

次に二人目です。
喋る時、疑問符ばかりの男の子。
小柄で、女顔。
それがコンプレックスで言われるとキレる。

という感じです。
難しいかと思いますが、アンケートしてくださる時は一人目のことは『興味』、二人目のことは『疑問』でお願いいたします。

ご協力お願いします。

アクセス数は２００００を突破し、ユニークも２０００を突破いたしました。
皆様のおかげです。
ありがとうございました。
お気に入りにしてくださった方にも感謝いたします。

あっ、アンケートのことですが、今から二週間ということにさして頂きます。
それと主人公が決まってから、二・三ヶ月の準備期間を頂かしてもらいます。

長々と失礼いたしました。
それでは…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8443p/

前途多難です…

2011年1月31日00時13分発行